

|          |                      |
|----------|----------------------|
| 氏名       | 矢野修一                 |
| 学位(専攻分野) | 博士(経済学)              |
| 学位記番号    | 論経博第316号             |
| 学位授与の日付  | 平成18年1月23日           |
| 学位授与の要件  | 学位規則第4条第2項該当         |
| 学位論文題目   | 可能性の政治経済学—ハーシュマン研究序説 |

論文調査委員 (主査) 教授 本山美彦 教授 岩本武和 教授 八木紀一郎

### 論文内容の要旨

本論文は、数多くの著作を残し、経済学をはじめ、社会科学全般に今なお多大の影響を与えている A. O. ハーシュマンの議論を、「公の復権」という独自の視点から体系づけようとしたものである。なぜ、改めてハーシュマンを取り上げるのかという問題意識をまとめた序章、簡潔に結論を述べた終章を含め、論文は全10章から構成されている。

序章では、本論文全体、個別的には第2章で扱われる「ポシビリズム」の意味・意義、ハーシュマンの方法論の特徴が述べられる。ハーシュマンの理論は、現実べったりのリアリズムでもなければ、根拠のないユートピア的なものでもない。困難な状況の中でも、現実的な「可能性」を見つけだし、それを育もうとしてきたハーシュマン理論のキーワードであるポシビリズムを、本論文は、E. H. カー、P. フレイレ、M. ヴェーバーなどに言及しながら、社会科学における有効な方法論の1つとして、積極的に評価している。ハーシュマン理論の根底には、新自由主義、国家主義の拒否というスタンスがある。権力の暴発を抑え、人間社会の多様性・自由を保持する、現実的な「可能性」を秘めた制度として、民主主義と市場経済の重要性があるとハーシュマンは説く。不完全な人間社会が、長い苦難の歴史を経て、辛うじて作り上げた民主主義と市場経済という制度を、単なる理想とするだけではなく、現実社会で、そうした制度を実際にうまく機能させるにはどうすればよいかという問題意識が、ハーシュマンのポシビリズム論には反映されている。

第1章「ワシントン・コンセンサス批判と日本式開発主義」では、いわゆるワシントン・コンセンサスと日本式開発主義の双方を批判的に検討することによって、「真の変化を誘発する知性の要件」を浮かび上がらせるとともに、ポシビリズムの現代的意義を確認し、本論文全体のテーマを端的に扱っている。第2章「ポシビリズム・不確実性・民主主義」において、序章で解説した内容をより具体的に掘り下げたのち、第3章「大戦間期世界経済の構造分析」では、古典的評価を受けているハーシュマンの第1作である『国力と貿易構造』(1945年)が、様々な論者の議論を交えて検討されている。すでにこの時点で、ポシビリズム論の原型が、大国による小国への権力政策行使を実証的に論じるという流れの中で浮かび上がっていた。

第4章「情念制御の開発思想」、第5章「企業家的機能と改革機能」、第6章「開発プロジェクト評価と発展プロセスへの視点」の各章では、ハーシュマンの開発論・経済発展論に対し、ポシビリズム論の視点から光が当て直されている。初期のハーシュマンといえば、不均整成長論という発展戦略論の提唱者として位置づけられているが、上記各章は、個別の戦略論よりも、むしろ、その根底に横たわる彼の人間観、発展観、市場経済認識を探っている。その上で、J. A. シュンペーターの議論と関連づけながら、ハーシュマンの開発論の意義を再発見している。

第7章「世界銀行『改革』のさざ波と社会的学習」は、近年の世銀改革の進行の中で、ハーシュマンが国際開発機関からも再評価されるようになった事情を追う。しかし、世銀によるハーシュマンの評価は、図式的すぎると本論文は批判する。第8章「経済学・政治学架橋の試み」においては、ハーシュマンの「離脱・忠誠・発言」モデルを簡潔にまとめた後、その意義が論じられる。「競争」が衰退からの回復を実現する有力な武器として位置づけられている風潮に対して、ハーシュマンは異議を申し立て、競争も多くの選択肢の中の1つにすぎないと、競争を相対化した。この視点は、開発・市場移行、ま

た民主主義を考察する上で、非常に重要である。終章「極論との訣別」では、利害対立の渦巻く人間社会において、その対立を社会、組織の崩壊に至らしめることなく、「求心化の契機」とするためには、ポシビリズムに倣い、新自由主義や国家主義といった極論からの訣別が必要になるということが、本論文の結論として述べられる。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、経済学をはじめ、社会科学全般に今なお多大な影響を与えている A. O.ハーシュマンの議論を、「公共性の回復」という視点から体系づけた大作かつ力作であり、今後のハーシュマン研究は、本書をひもとくことなしに進めることは不可能であろう。

本論文の学術的貢献は、以下の点に認められる。

第1に、本論文において、何よりもまず評価すべき点は、「ポシビリズム」を切り口に、ハーシュマンの様々な著作の全体像を明らかにしたことである。国際関係論、開発経済論、経済思想、政治思想、組織論、ラテンアメリカ経済論等、ハーシュマンの議論は、個々の分野においては日本でもよく知られているが、学問・思想の全体像は、本論文によって、明らかになったと言える。

第2に、本論文は、ハーシュマンの祖述の域に止まるのではなく、冷戦終結後の世界情勢、国際開発機関の動きにも目を配りながら、彼による「問題の発見の仕方」、その「問題への取り組み方」を現代的視点から再評価しようとしたところに意義がある。「鶴のような」とも評される彼の議論に粘り強く付き合い、その意図をえぐり出した力量は高い評価に値する。

本論文によれば、現代世界は、安穏としたものではなく、まさに「行き場のない憤怒と怨嗟が渦巻いている」状況にある。こうした暗澹たる状況に対し、必ずしも競争メカニズム、市場原理一辺倒ではないやり方を採用することによって、一定の成果を挙げている事例も世界には数多くある。しかし、それらの取組を無駄で非効率と見なす経済学者も多い。それに対して、ハーシュマンは、異なった視点から問題を発見するとともに、その問題解決の糸口を探ろうとした。

第3に、本論文は、ハーシュマンの様々な著作から、社会科学の方法論として発展的に継承したことに意義がある。本論文は、現代社会の諸問題に対処すべき視点を次のように説いている。新自由主義的な世界では無視される、非合理的なことが、なぜ現実に生じ、しかも持続するのか、そしてまた、なぜそれが望ましくさえあるのか。狭く限られた理論体系の下で、人々の営為を「計測」し「評価」していたのでは、新たな「可能性」はけっして見いだされない。ハーシュマンは、国家主義に傾くことなく、人知の限界と「意図せざる結果」を重視し、問題山積の状況の中に「隠された合理性」を見つけだして、社会の変化プロセス、希望への道筋を明らかにしようとした。本論文は、精緻化は進むものの、ヴィジョンに欠けるとされる経済学に一石を投じる業績と言えるであろう。

最後に、本論文に残された課題、ないしは要望について触れておく。

第1は、多様な経済学との対話の方向性をハーシュマンに見出して欲しかったことである。ハーシュマン理論は、離脱（エクジット）に集約される市場的行動と、発言（ボイス）に集約される政治的行動を結びつけたものであるが、現代の経済学は、様々な形でエージェントの行動を介して経済と政治を再結合する途を探求している。もし本論文の著者が、ハーシュマンにならって、かつての構造論的、あるいは決定論的な政治経済学（ポリティカル・エコノミー）と異なる「政治経済論」（ポリティカル・エコノミクス）の可能性を探求するといふのであれば、経済学内部の多様な理論的發展に対してなお広い視野をもって対話を行い、応用的な展開も含めて、ハーシュマン的な思考の発展を目指すべきである。

第2は、ハーシュマンの理論が、その意図に反した方向に利用されることへの危険性についての認識において、本論文はいささか甘いという点である。本論文は、ハーシュマンに依拠して、多くの経済開発論では脱落されがちな社会と経済、そして政治の相互作用を、とらえる思考様式を探求したものであるが、説明されているハーシュマンに関するかぎり、市場経済と民主主義を重視する点において、世界銀行その他の国際機関の公式見解とはさほど隔たるものではないように思われる。この点、ハーシュマンの市場経済や民主主義の理解が、先進国的なバイアスからどれだけ自由であるか、とくに「ネオコン」的な市場経済と民主主義の理解とどう異なっているのかを明解にしておくと、ハーシュマン理論をさらに発展させることができたものと思われる。例えば、本論文で好意的に引用される A. トクヴィルは、「ネオコン」の隠れたバイブルでもある。反テロ戦争を世界で仕掛ける米国に対し、ポシビリズムはどのようなスタンスを取るのか。大国による権力政策の行

使については、『国力と貿易構造』以後、ハーシュマン自身は必ずしも十分に議論していない論点だけに、本論文による独自の展開が欲しかった。

そうした残された課題があるものの、非常に意義深く、また興味深い研究で、本論文が、ハーシュマン研究を大きく前進させた貢献は疑いようのない事実である。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成17年11月21日、論文内容と、それに関連した試問を行った結果、合格と認めた。